

## ニーチエと自然 (一)

中島敦の作品を介しつつ (序に代えて)

河 内 信 弘

\*

自然とは何か、何を意味するのか、この間に人間は正しく答えることが出来ないかも知れない。しかし、なんらかの形で、人間は自然に相対していることは間違いない。人間と自然との相対が、それぞれの文化を形成する重要な要素であることは疑いないであろう。

我々にとって、自然の中に生きるということは紛れのない事実であると思われる。あるいはこのことは次第に我々の意識の中から消えつつあるかも知れないが、いまだ完全な過去形で表現するには至ってはいないであろう。自然の中に生きるということ、つまり、人間を自然中心に据えるのではなく、自然の一部として人間が生きているということに対して、ヨーロッパの歴史は別様に思われる。自然の中に神を見出しながらも、神を自然から独立した存在となし、自然を排し、人間と神との結びつきを中心とした歴史がそこに見出せよう。もちろん、このように簡単に述べることの出来ない複雑なものが、それぞれにあるのは当然であろうが。

この歴史を縦の糸とすれば、それぞれ生きる人間は横の糸といえよう。しかし唯生きているだけでは、歴史に触れることは出来ない。歴史をよみがえらせ、伝統に生きようとする事、あるいは批判することは、努力と自覚を必要とするであろう。自然の問題も、人間の内外の自然への深い眼差しと、歴史を貫く自然への理解のあり方と交わるところで考えなければならぬ。ところがここに実に困難な問題がある。自然そのものは決して語ることがないのである。

人間の内には本性として、本能として、自然が与えられ、人間の外には人間を取りまく自然として、自然は存在するであろう。そしてそれらは複雑にからみ合っている。<sup>(1)</sup>人間の精神は、この自然に付随しているものなのか、あるいは逆のものであるか。あるいは人間の内外にある自然を統一するものなのか。それは極めて困難な問題である。そこに個々の人間の意志と決断が絡み合ってくる問題でもであろう。また、個々の人間の育った文化、歴史も絡み合ってくる。<sup>(2)</sup>

ニーチェにおける自然の問題に、中島敦を引合に出すのは、これらを念頭においてのことである。ニーチェが自然を、人間を取まく大きな輪を、肯定しようとするそのことには、我々が自然と人間の関係を見出すことそのこととは、別様の意味が付随している。この付随する別様の意味は、中島敦の作品、特に『名人伝』を考えると、一層明らかになるであろう。本稿は、ニーチェにおいて、自然の問題が重要な意味を持つことを指摘し、ニーチェが自然を問題とするそのことが、我々の持つ自然と人間の関係以外に別様の意味を持つことを、指摘するものである。それによって、今後のニーチェと自然の問題の序に代えようと思うのである。

(1) カール・レーヴィット「デカルトからニーチェまでの形而上学における神と人間と世界」(柴田治三郎訳岩波書店昭和四十八年)の内「人間の自然と自然の世界」参照。

(2) 自然と人間の関係については「風土」(和辻哲郎著)は我々に様々のものを教えてくれる。

\*

自然の問題はニーチェの根底に深く横たわっている。しかも、ニーチェの自然への深い感性を抜きにして、この問題を考えることは出来ない。この深い感性はニーチェの基本的性格に結びついていて、高坂正顕はニーチェの三つの基本的性格を次のように述べている。

「第一は、自然の中に詩を感ずる自然詩人的性格であり、第二は、生命を音楽として感ずる音楽的性格であり、第三は、深く人間を愛する人類に対する愛人的性格である。」<sup>(1)</sup>

自然詩人的性格が第一に挙げられている。これは「ヴェネツィア」の詩から象徴的に指摘されているが、自然への感性が特に深く結びつくのは、晩夏、あるいは秋であることはいうまでもないであろう。晩夏、あるいは秋に、ニーチェの内と外にある自然が美しく、見事に結びつくのである。

「魂の生れながらの秋めいたもの、深い十月の幸福——ニーチェの言葉を使うならば——はニーチェの最初から明らかに見出せる。」<sup>(2)</sup>

しかし自然への感性は美しきもののみに対応していくのではない。「深い十月の幸福」を自分の内に持つニーチェは、同時に、「意識の部屋」の外に美しくあらざるものを見据えてもいたのである。

「人間は、知らないが故に関心を持たないが、あたかも夢の中で、虎の背にまたがっているかのように、貪欲なものに、飽くなきものに、吐きけを催させるものに、無慈悲なものに、残虐なものに、いかに基づいているか」<sup>(3)</sup>をニーチェは気付いていたのである。しかしニーチェはこの事実を目をそむけず、その不幸を背負うのである。

自然への感性が、自然を見、聞きとり、思想として現われるとき、ニーチェにとって、これは二重の深い意味を持っている。一つはニーチェ自身が自分の道を歩むことを意味し、一つは、自分自身の道を歩むことそのことが、ヨーロッパ二千年の歴史が捨て去った世界を取り戻す試みとなることである。レーヴィットは、ニーチェの言葉を要約、引用しつつ、次のように述べている。

「ニーチェは一世紀も前（一八六三年）十九歳のときすでに、自伝的なノートの中で、一切を包括するものを問う決定的な問を自分自身に投げかけて、それは神であるか世界であるか、と書いた。『私の生涯』は、 $\wedge$ 私は植物として神の畑（墓）の近くに、人間として牧師の家に生れた $\vee$ という記憶すべき文章で始まる。それは、もう事象に導かれるのではなくて、みずから手綱を取って、生の中へ踏み出して行く時が来るといふ確認をもって終る。 $\wedge$ そのようにして、人間は、かつて自分からみついていたすべてのものから、抜け出す。鎖を断ち切るまでもない。ふいに……鎖が落ちるのだ。そして、人間を最後にまだ囲んでいる環は、どこにあるのか？ それは世界か？ それは神か？ $\vee$ ニーチェは、聖書の神を否定して、人間をもいっしょに包む世界の $\wedge$ 大きな輪 $\vee$ を肯定すべく、決意した。そして、それと同時に、キリスト教的・プラトンの形而上学、すなわち $\wedge$ 背後の世界 $\vee$ を否定すべく決意した」<sup>(4)</sup>

レーヴィットが記憶すべき文章といったその文章に、ニーチェの内にある自然が、外にある自然と深く、断ち切り難く結びついていること、つまり人間をも共に包む世界の大きな輪の中にいる自覚と、不幸にしてからみついた神の輪の自覚を読みとれるであろう。そしてなにより自己の内に自然の存在することを確認しなければならなかったであろう。

人間の内と外にある自然の美しきものだけでなく、覗けば覗くほど、その深淵に呑み込まれてしまう深く不気味な深淵をはっきりと見据えながら、「大きな輪」を肯定しようとしたニーチェには、それだけで深い苦悩と孤独が約束

されていたともいえよう。このことがまた、ヨーロッパ二千年への拒絶、批判を意味していたのだから、ニーチェの孤独は、我々には測り知れないものがあるろう。

この「大きな輪」の肯定の現われの一つは、自然を実現しようとする思想であると考えられる。そしてこの自然を実現するという思想はニーチェを貫く一本の糸なのである。これはニーチェの自然への感性を抜きにして考えることは出来ないが、感性が感性にとどまらず、思想として確立するには、深き体験がなければならぬであろう。ニーチェの内にある自然と外にある自然の高められた合一の体験である。

「自然はこの認識（哲学者、芸術家、聖者を通して、自然は目標に到達したという認識——筆者——）によって神々しくなり、そして穏やかな夕べの疲れ、つまり人間が『美』と呼んでいるものが、自然の表情にうかぶのである。自然が、その時この神々しい表情で語るものは、存在するものへの偉大な啓蒙である。そして死すべき者が望み得る最高の望みは、絶えず、耳を開いて、この啓蒙に加わることである。」<sup>(5)</sup>

外にある自然の美しさと、内にある自然の重り合う体験がこの表現に読み取れるであろう。それなくして、このようにいい切ることは出来ないと思われる。この体験のいかに深いかを知ることが、ディオニゾス体験の一半を知ることになると思われる。美という概念から得るものが少ないのに反して、美しきものからは、我々は実に多くのものを得ることが出来る。美しい自然の光景から得るものが実に深いものであることも疑いようのない事実であろう。

しかし、ニーチェが語るところは、自然の啓蒙するところに人間が加わるのであり、決して自然そのものと人間がなるのではないことに注意する必要があるろう。人間が自然を実現するのである。

このように自己を確立してゆく上において、古代ギリシャは、ニーチェにとって深い意味がある。現在から得るものを、過去にも豊かに発見し、ニーチェは自らを深めて行くからである。ニーチェは古代ギリシャに自己を投入し、そこから多くを学びとる。その姿を阿部次郎は次のように述べている。

「在来の意味における希臘的快活が希臘文化の真髓であるならば、それは宇宙と人生との悲痛に徹してそこから前人未聞の大歓喜を汲み出し来らうとする。『なほいまだ知られざる神の使徒』ニーチェにとって十分に *vorbildlich* であることが出来ない。希臘文化の根底に、新しい意味において人類の *Vorbild* となるものは存在しないか。敬虔な被教育者ニーチェは、自己の血肉に喰ひ入る問題として、独自の途によってこれを希臘文化の中に見出そうとする。そして磁石が鉄分の存在を触知するやうに、彼自身の求むるものをそこに豊かに発見する。ゆゑにこの書は一面において、ディオニュソスの体験と自己成熟を求むる意志との表現でもある。」<sup>(6)</sup>

シレノスの深い哀しみに満ちた、また残酷な叡知を底に秘めつつ、壮麗な世界を打ち建て得たギリシヤ人に、ニーチェは自己の豊かな実りを見出したのである。そしてその一つが、自然を實現しなければならぬ確信として、思想として現われて来たといえよう。

この思想を核の一つとして、激しい批判を同時代に加えてから、ニーチェには苦痛に満ちた孤独の十年が待っていたのである。この十年については、今ここで述べないが、いずれ述べることになるはずである。今はニーチェにおける自然の問題が、ニーチェを貫いていることを概観することが目的であるから、一挙にとぶことにしたい。

「ツァラトゥストラは、三十歳のとき、彼の故郷と故郷の湖とを去って、山に入った。ここで彼は、彼の精神と彼の孤独とを楽しみ、そのことに十年のあいだ倦むことがなかった。だがついに彼の心は変わった。——そして、或る朝、彼は曙光とともに起きて、太陽の前に歩み寄り、太陽に向かって次のように語った。

『おまえ、大いなる天体よ！ もしおまえが、照らしてやる者たちを持たなかつたら、おまえの幸福はどうなることであろう。』<sup>(7)</sup>

ここに伝説のゾロアスター(ツァラトゥストラ)が、イエスの「荒野の誘惑」の物語に対するニーチェの対抗意識が、ニーチェの根本的諸思想が十年の孤独のうちに成熟したこと等が見出されるであろう。<sup>(8)</sup> がさらに、ニーチェの自然へ

の深い眼差しを見出すことが出来よう。ニーチェはかつて次のように述べた。

「かつてある思想家が登ったように高く、透明なアルプスの大気、氷の大気の中に登ることが出来るならば！霧に包まれることもなく、ヴェールに覆れることもなく、存在するものの根本的性質が、粗々しく、揺ぎなく、しかし見落すことのできないほど分りやすく、表われているところへ登ることが出来るならば！ただそう思うだけで、魂は孤独となり、無限となる。」<sup>(9)</sup>

この一節は「ツァラトゥストラ」の冒頭と深く重り合うのではなからうか。ツァラトゥストラの孤独の十年は、人間の内にある自然、外にある自然の如き区別の必要ない、自然と人間の一体となった十年といえよう。しかしツァラトゥストラは再び人間となろうとする。そこにはニーチェの深く人間を愛する性格や、人類の教師たらんとする性格等、様々あると思われるが、黙して、決して語ることのない自然を迎い入れ、自然の言葉にならない言葉を聞きとり、人間が自然を実現してやらなければならないとする思想が深く横たわっているであろう。そしてこの自然を実現したものとして超人が考えられるのである。

「かつてひとは、もろもろの遙かなる海を眺めやったとき、神、といった。だが、いまわたしは、超人、ということ、きみたちに教えた。

.....

神は一個の仮想されたものである。しかし、この仮想されたものの苦汁をすべて飲んで、死なずにおれる者があろうか？ 創造者から、その信念が、またワシから、ワシの領分たる遙かなる高空でのその浮遊が、奪われてよいだろうか？

神は一個の思想である。この思想は、一切のまっすぐなものを曲げ、また一切の直立しているものをくるめかせなのだ。そうじゃなからうか？ 時間は消え去り、そして一切の移ろうものはただの虚妄にすぎなくなるのじゃな

「かろうか？」<sup>(10)</sup>

神を一個の仮想されたもの、一個の思想としてとらえ、神が奪い去ったものを、ニーチェは取り戻さなければならなかったのである。だが、遙かなる海が失われているわけでもなければ、ワシの領分たる遙かなる高空が失われているわけではない。神を創造し、神の本来住むべき場所から独立させ、一つの神 Gott に集約させ、永遠の世界を、神の世界を創出し、ヨーロッパ二千年の歴史は一切の移ろうものからなる自然を捨て去って来たのである。現に間違なく存在するものを、曲げ、くるめかせて来たのである。その虚妄そのものに目を向けさせること、それがニーチェの課せられたものなのである。それは

「あらゆる移ろいやすさへの讚美<sup>(11)</sup>と是認<sup>(11)</sup>」

であり、ツァラトゥストラの口を借りて、次のように表現されている。

「イチジクの木々から、その実が落ちる、その甘味な実が、そして落ちるさい、それらの実の赤い皮が裂ける。わたしは熟したイチジクの実を吹き落す北風である。」<sup>(12)</sup>

自然の、大地の養分を十分に吸収すれば、イチジクの木は甘味な実をつけ、落ちる。この事実は見間違えようのないものである。我々はこの比喩を、そこにいかなる深い困難な問題が含まれていようと、素直に受け入れるであろう。しかし、この比喩が、ヨーロッパ二千年への深い洞察として存在する時、我々の測り知れぬ意味が含まれていることを知るであろう。ニーチェはツァラトゥストラを北風と言わざるを得なかったと思われる。

「フリードリッヒ・ニーチェは西洋の精神史における偉大な運命的な人物の一人であり、最後の決断を要求する宿命的人間である。古代の遺産と、二千年にわたるキリスト教によって定められながら、これまでヨーロッパ人が歩んで来た道におかれた一つの恐ろしい疑問符である。」<sup>(13)</sup>

遙かなる海を、遙かなる高空を伝えるそのことが、疑問符としてのニーチェの課題の一つである。逆にいえば、こ



のようなことを伝えることが、疑問符の一部を形成すること、それはヨーロッパ二千年の歴史を抜きにしては考えることは出来ないであろう。

- (1) 高坂正顕著作集第四卷(理想社昭和三十九年)三二五—三二六頁
- (2) E. Bertram: Nietzsche, 8Aufl, H. Bouvier, 1965. S. 248
- (3) Nietzsche Werke, Kritische Gesamtaufgabe III2, hrsg. von G. Colli und M. Montinari, W. de Gruyter (Vt)本書からの引用は K.G. とする) 1973, S. 254
- (4) カール・レーヴィット「神と人間と世界」一五三—一五四頁
- (5) K. G. III, 1972 S. 376
- (6) 阿部次郎全集第九卷(角川書店昭和三十六年)二七頁
- (7)(10)(11)(12) K. G. VI, S. 105—107 邦訳はニーチェ全集第九卷「このようにツアラトウストラは語った」吉澤伝三郎訳(理想社昭和四十六年)によった。
- (8) ニーチェ全集第九卷の内訳注参照五二六頁  
高坂正顕著作集第五卷三二二頁—三二二頁
- (9) K. G. VI, S. 377
- (13) E. Fink: Nietzsches Philosophie 3Aufl, W. Kohlhammer, 1973 S. 7

\*

自然の問題がニーチェを貫く糸の一本であることを概観して来たが、今後この自然の問題が、いかなる深みと、いかなる拡がりを持つかを詳しくたどってみたいと思っている。ところでその前に、日本人の自然に対するあり方を考

えてみなければならぬ。自然と人間のあり方は日本人にとって極めて深い意味を持ち続けていることはいうまでもないであろうが、ニーチェにおける自然の問題を考へるとき、否応なしに我々の考へる自然と相對することを要求される。ニーチェは自己との對決を要求する思想家であるからである。ここである種の答へが出てくるかに見えても、それは疑問符のついた一つの答にすぎず、むしろ出発点の確認であり、決して到着点の確認ではない。今後ニーチェをたどるうちに、様々の紆余曲折が生ずるのである。それでもやはり、出発点の確認だけはしておきたい。

日本、あるいは東洋における自然の問題を、中島敦の『名人伝』を中心に考へてみたいと思う。中島敦が、自然の問題に關して、大きな意味を孕んだ作家とはいえないかも知れないし、また、ニーチェの深い影響を受け、對決した作家ともいえないであろう。中島敦を取り上げるのは、そのような視点ではない。昭和十七年、三十三才の若さでこの世を去った中島敦にも、「日本の優れた芸術家達の行為に貫道してゐる」<sup>(1)</sup>もの見方が、貫ぬかれていることを『名人伝』に見出すことが出来るからであり、極めて簡潔に刻まれた形として表われているからである。小林秀雄は、この貫道する見方、觀、つまり空觀を次のように述べている。

「空觀とは、真理に關する方法ではなく、真如を得る道なのである。現実を様々に限定する様々の理解を空しくして、はじめて、現実そのものと共觀共鳴する事が出来るとする修練なのである」<sup>(2)</sup>

この修練の一つの形を『名人伝』に見出せるであろう。また

「西洋とは何かと云ふと、はつきりした定義はむづかしいにしても、唯、漠然と西洋と云ふものを感じるのであるが、此感じの底には、西洋には『無心』がなくて、東洋にはあると云ふやうなところで両者の區別を認められはせぬか知らんと思ふ」<sup>(3)</sup>

と鈴木大拙は述べているけれど、この「無心」の一つの形を見出せるであろう。そして「無心」を體現した人間を、人々が素直に受け入れる様を見出せるであろう。中島敦が、「空觀」であろうと「無心」であろうと、自らのも

のとしたとは言いきれないと思うが、作品に表現出来ることは、伝統の持つ不思議な働きといわざるを得ない。

ニーチェを念頭におきつつ中島敦の作品の流れを追った後、『名人伝』を考えてみよう。さて中島敦にニーチェの影響は見出すことが困難と思われる<sup>(4)</sup>。自分の身边を描いたと思われる『かめれおん日記』に次の文章を見出すことが出来る。

「全くの所、私のも、の見方といったって、どれだけ自分のほんものがあろうか。いそ、つ、ぶの話に出て来るお洒落鴉。レヲパルディの羽を少し、シヨペンハウエルの羽を少し。ルクレチウスの羽を少し。莊子や列子の羽を少し。モンテエニユの羽を少し。何といふ醜怪な鳥だ<sup>(5)</sup>。」

シヨペンハウエルを見出せても、ニーチェは見出せない。しかし、両者に共通の土台として、考えることの出来るものがある。それは人間とは、自分とは何かを問うことが、自ら生み出すものといえるかも知れない宇宙と人間の関係である。ニーチェは次のように述べている。

「無数の太陽系となって、輝きながら注ぎ出される宇宙のどこか遠い片隅に、一つの星があった。そこには認識というものを作り出した賢明な動物が住んでいた。それは世界史における、最も思い上り、最も欺瞞に満ちた瞬間であった。しかしほんの一瞬でしかなかった。自然が、ほんのしばらく呼吸すると、星は凍ってしまった。賢明な動物は死ななければならなかつた<sup>(6)</sup>。」

ニーチェはここから臆くすることなく、大胆に進んで行く。一方中島敦は『狼疾記』の中で主人公三造を通して次のように述べている。

「小学校四年の時だったらうか。肺病や、みのやうに痩せた、髪の長い受持の教師が、或日何かの拍子で、地球の運命といふものに就いて話したことがあった。如何にして地球が冷却し、人類が絶滅するか、我々の存在が如何に無意味であるかを、其の教師は、意地の悪い執拗さを以て繰返し繰返し、幼い三造達に説いたのだ。……三造は怖

かった。恐らく蒼くなって聞いてゐたに違いない。……

子供の時中毒<sup>あだ</sup>ったことのある食物が一生嫌ひになって了ふやうに、この様な・人類や我々の遊星への単純な不信が、もはや観念としてではなく、感覚として、彼の肉体の中に住みついて了つたのではないか、と三造は思ふ。<sup>?</sup>

ここに人間の存在が全ての中心としてあるのではなく、人間は滅び行くものであり、地球もまた、同様であることを、思想の出発点に持っていることが分るのである。ところでこのような人間、宇宙のことは誰れでも知っていることでありながら、ほとんどの人は素通りして行くことでもある。そこに人間存在の根底を揺がす不安を感じ取る、あるいは、認識の欺瞞、いわゆる真理の欺瞞を見抜く基盤を見出すことは、そこを素通りする人間から見れば、異常であるかも知れない。しかし素通り出来ない者、あるいは深い感情を移入出来る者は、そこに深い意味を見出すであろう。後に人間として深みと拡がりを持つにつれて、それは変化してゆくかも知れないが、深く根底に横たわるものとなる。ニーチェと中島敦はこのような根底に横たわるものを持ちながら全く別の道を歩んでいく。

ニーチェには古代ギリシャが、中島敦には古代中国が、その根底に深く横たわっている。ニーチェは、前述のように、古代ギリシャに自己を投入し、そこに豊かな実りを見出し、自己を確立してゆく。中島敦にとっては古代中国は、最初から血肉であったといえよう。<sup>8)</sup> 詩人の原型を扱った『狐憑』が、ホメーロスよりはるか昔のギリシャを題材とし、過去の中に己を見出す物語である『木乃伊』が、古代ペルシャと古代エジプトの戦いを題材にしていることは興味深い。自己を見出し自己を確立して行くのは、他に自己を写し出すことによつて始まることの証であろうか。

中島敦は自虐的といえる作品から、『狐憑』、『木乃伊』を経て、中国の古譚を題材にした傑作『山月記』を生み出す。自ら恃むところすこぶる厚い主人公が、その性情にふさわしく、虎に変ずる物語である。人間が虎に変ずることを、我々は怪奇としてのみ受取ることはないであろう。自然の中で自然そのものとして生きる虎と、人間そのものに根本的差異を、さらに生とし生けるものに根本的差異を見とめていなかつた歴史を我々は持っているように思われ

る。泉鏡花の『高野聖』の世界、中島敦の表現に従えば、「かの『高野聖』の怪奇妖艶な幻想」<sup>(9)</sup>も、この歴史を抜きにしては考えられぬ世界であろう。美しき女は、また女によって醜怪な動物に変えられた人間は、妖艶であり怪奇であり、それらは、作者によって作り出された世界に違いないが、自然そのものの世界から独立したものは思われず、自然そのものの中に返し得ると思われる。人間が虎に変わるといふ物語の奥深い裏側に、人間と自然の決して別たれることのない世界を考えることが出来るであろう。

ステイヴンソン (Robert Louis Stevenson 1850~94) のサモア島での生活を扱った『風と光と雲』によって、中島敦は世に出る。この作品は、

「性格や心理は、表面に現われた行動によってのみ描くべきではないのか？」<sup>(10)</sup>  
に貫ぬかれている。この考えは後の優れた作品に貫ぬかれるものとなる。

「——『わが西遊記』の中——」の二編、『悟浄出世』、『悟浄歎異』には、それまでの、いわば集大成と、覚悟が見出される。<sup>(11)</sup> それ以後表面には決して出ないが、深く横たわるものがここには出ているのである。つまり、「表面に現われた行動」が、みごとな形となって現われる後の傑作の、根底にあるものが、そこにあるのである。

「夕暮の空へ毬を投げ上げる

(佛様の掌の上の孫悟空)

大きなものを構成する一つの分子として自分を眺めることによって、「安心」落着いた気持を感じてゐる人が多い。だが、その大きなもの、それ自身が不確かだった場合、それでも安心してゐられるであろうか？<sup>(12)</sup>

これは『狼疾記』以前に記されたノートにあるものである。先に引用した『狼疾記』の一節と深い関連が見出されるであろう。更に『悟浄出世』にも深い関連を見出せる。

今迄当然として受取って来た凡てが、不可解な疑はしいものに見えて来た。今迄纏まった一つの事と思はれたも

のが、バラ／＼に分解された姿で受取られ、その一つの部分々に就いて考へてゐる中に、全体の意味が解らなくなつてくるといった風だつた。<sup>(13)</sup>

このように悩む悟浄は流沙河の川底に「大きなものを構成する一つの分子」として安住する妖怪をたずね歩き、不安を取り除こうとする。それは自然の様々の姿を、自然の中に住む様々のものをたずね歩くことに他ならないであろう。しかし悟浄は求むるものを得ることは出来なかつたのだが、観世音菩薩摩訶薩の言葉を聞くのである。

「惟ふに、爾は観想によつて救はるべくもないが故に、之より後は、一切の思念を棄て、たゞ／＼身を働かすことによつて自らを救はうと心掛けるがよい。時とは人の作用の謂ぢや。世界は、概観による時は無意味の如くなれども、其の細部に直接働きかける時始めて無限の意味を有つのぢや。悟浄よ。先づふさはしき場所に身を置き、ふさはしき働きに身を打込め。身の程知らぬ『何故』は、向後一切打捨てることぢや。」<sup>(14)</sup>

そして観世音菩薩は、悟浄に玄奘法師に従ひ、天竺に行くようにと諭すのである。『悟浄歎異』は、悟浄の玄奘法師、悟空、八戒との旅の物語である。この旅は八戒と同様、「幻滅と絶望との果に、最後に縋り付いた唯一筋の絲に違ひない」<sup>(15)</sup>のである。悟空に、自ら燃えていることを知らない「燃え盛る火」<sup>(16)</sup>を見出し、悟浄は玄奘法師の中に、そして自らの内に次のようなものを、見出し、この物語は終る。

「師父は何時も永遠を見てゐられる。それから、その永遠と対比された地上のなべてのもの、の運命をもはつきり見てをられる。何時かは来る滅亡<sup>ほろび</sup>の前に、それでも可憐に花開かうとする叡知<sup>ちえ</sup>や愛情<sup>なさけ</sup>や、さうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎と慙れみの眼差を注いでをられるのではなからうか。星を見てゐると、何だかそんな気がして来た。俺は起上つて、隣に寝てをられる師父の顔を覗き込む。暫く其の安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いてゐる中に、俺は、心の奥に何かポツと点火されたやうなほの温かさを感じて来た。」<sup>(17)</sup>

自虐的な作品から出発しなければならなかつた中島敦の生き行く姿と、ある悟り、覚悟がここに見出せるのではな

ろうか。

こうして『名人伝』に至るまでたどってみると、そこには『名人伝』には現われることのない、幻滅、絶望、人間存在への深い哀しみが横たわっていることを知ることが出来る。このようなことを念頭におく時『名人伝』はその簡潔に刻まれた姿の奥底に様々の問題を含んでいることが分るのである。そこで『名人伝』を考えてみなければならぬ。

『名人伝』は紀昌が弓の名人になるまでの修業と、名人になり死に至るまでの物語である。紀昌は思想家でもなければ宗教家でもない。弓の名人に過ぎない。ツァラトウストラを念頭におく時、このような人物を考えるのは不適当と思われるかも知れない。しかし出典が『莊子』であることを考えると、そこには、深い意味が表面に現われていないだけのことである。

「至人というものは、登っては青天の高さに達し、下っては地下の黄泉のうちにくぐり、八方の地の果てまで自由自在にふるまい、心にみじんの動揺もないものだ。」<sup>(18)</sup>

紀昌の修業はこのような境地へと達するのである。それはまた、自分にふさわしい場に身を投じ、自分にふさわしく行動する時、おのずと通じてゆくものであろう。

さて紀昌の五年間の修業は、弓を射るためには、極めて合理的なものである。「先づ瞬きさせざることを学」ぶ二年、「視ることを学」ぶ三年は、<sup>(20)</sup>学ぶ姿は奇妙でも、学ぶことそのものは合理的なのである。しかもそれは、的を見ることその一点に集中している。この五年の修業の後、紀昌は師飛衛に技を授けられ、またたく間に師と同じ力量に達するのである。そこで飛衛は紀昌を甘蠅のもとに行くように推める。紀昌は山に登り、甘蠅老人に会う。

「気負ひ立つ紀昌を迎へたのは、羊のやうな柔和な目をした、しかし酷くよぼくの爺さんである。年齢は百歳をも超えてゐよう。腰の曲つてゐるせゐもあつて、白髯は歩く時も地に曳きずつてゐる。」<sup>(21)</sup>

この老人から紀昌は不射之射たる弓の奥儀を、「芸道の深淵を覗き得た」<sup>(22)</sup>のである。

「九年間、紀昌は此の老名人の許に留まつた。その間如何なる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ。九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変つたのに驚いた。以前の負けず嫌ひな精悍な面魂は何処かに影をひそめ、何の表情も無い、木偶の如く愚者の如き容貌に変つてゐる。」<sup>(23)</sup>

紀昌の山に入る前の五年の修業は、日常の世界における論理に従つての修業、つまり射之射のために修業であるが、山に入つての九年の修業は、自然の中で自然と一つになる修業である。人間が弓という道具を用いて、自然あるいは人間そのものと相對するための五年の修業が、その後の九年の修業によって、一大飛躍をとげて、射之射から不射之射へと変ずるのである。同時に弓を射る修業が全人的なものへと飛躍するのである。そしてとらわれることのない自由を得るに至るのである。

「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く思はれる。」<sup>(24)</sup>  
 弓の何であるかも忘れ去り、「紀昌は静かに、誠に煙の如く静かに世を去つた」<sup>(25)</sup>のである。

『名人伝』は極めて簡潔な物語であるが、中島敦の諸作品の流れをたどつて分るように、語られていないが、多くが隠されている。少くとも、ふさわしき場所に身を置き、ふさわしき働きに身を打ち込む紀昌を見出し、人間を永遠と、自然に対比し、永遠と自然の中へと入り行く紀昌を見出したといえよう。それは中島敦の生きて行く覚悟の現われと見ることが出来よう。彼の心に点火されたほの温かさの一つの結実といえよう。

この作品で注目すべきことは、自然と一つになった紀昌が、木偶の如き、また愚者の如き姿として現われることである。自然の何たるかを理解し、超人を抱くツァラトゥストラが、舞踏者として、子供として、映ずることと比較すると興味深いものがある。一方は人々に素直に、物分りよく受け入れられるに比べ、一方は孤独が待っている。紀昌はいわゆる常識の世界から飛躍し、不射之射、至言は言を去る世界に入っているにもかかわらず、決して人々から孤



立する孤独地獄に落ちることはない。人々は紀昌の飛躍を受け入れるのである。ツァラトゥストラは、自然を体現し、舞者者として子供として現われても、人々は受け入れず、孤独に落ちて行く。各々は各々のおかれた歴史を抜きにしては、この問題は考えられないであろう。

『名人伝』は、作者の現代的な目で解釈を加えられた作品というより、あたかも古代そのものの世界が蘇みがえったものというにふさわしい。その見事さは、作者の力量に負うことが多いとしても、自然と人間の一つになる考えが、古代から流れ続けていることを前提としなければならぬであろう。さもなければ、荒唐無稽の古譚としてのみ受取られるに過ぎないであろう。紀昌を受け入れた人々と同様、中島敦の『名人伝』を素直に受け入れるものを今まだ我々は持っていると思われる。作者たる中島敦が紀昌の境地に達していたかどうかは問題とする必要はないと思われるが、このような作品を作り得たことは注目すべきであろう。自虐から出発した中島敦が、紀昌のたどりついた境地を理解し、共鳴することなくしては、作品の成立は考えられないと思われる。先に述べたように「貫道するもの」は貫道するのであり、それに触れ得たからこそ、このような作品が生まれたに違いない。

紀昌の行動は決して真理を得る方法に重点は置かれていない。あくまで弓を射る修業であり、修練である。行きつくとところは、弓という道具に限定される世界を空しくし、始めて、現実そのものと一つになることが出来たのである。その現実是最早、人間の世界だけの現実ではなく、人間をも含む自然そのものの現実であろう。ここには人間があくまで人間として自然に対するのではなく、人間が人間であることすら捨て去った、無我、無心の世界があり、自然と一つになった世界がある。自然を、人間の自然と、自然の世界とに区別することすら必要のない全てを含む自然への信頼なくして成り立ち得ないことと思われる。さもなければ紀昌は文字通りの木偶であり愚者と化してしまいうであろう。

- (1)(2) 小林秀雄全集第九卷(新潮社昭和四十七年)二七頁。
- (3) 鈴木大拙「無心といふこと」(角川文庫昭和三十九年)三頁。
- (4) 中島敦のノートに「ニーチェの人間——は男——の笑ひについて」とだけ記されている。またオルダス・ハックスレイ「パスカル」の翻訳を、中島敦はしているが、ハックスレイはニーチェに言及している個所がいくつも見出せる。しかし影響という意味では、やはり見出すことは困難と思われる。
- (5) 中島敦全集第一卷(筑摩書房昭和五十一年)八九頁
- (6) K. W. S. 254
- (7) 中島敦全集第一卷一〇八頁—一一〇頁。ノートにおいては、これは三造の体験としてでなく、傳吉(作品には登場しない)の語るところとなっている。
- (8) 中島家は幕末以来の儒家の家柄であり祖父は漢学者であった。中島敦は漢籍の教養を積んだ人々を周囲に持ち、彼自身も漢籍の素養が深かった。
- (9) 中島敦全集第三卷三六頁。泉鏡花を持ち出すのは唐突と思われるかも知れないが、中島敦の東京帝国大学の卒業論文は「耽美派の研究」であり泉鏡花への言及も多い。引用はこの卒業論文からである。
- (10) 中島敦全集第一卷二六〇頁。
- (11) 昭和十六年五月八日付け田中西二郎宛の葉書に「西遊記(孫悟空や八戒の出てくる)を書いてゐます。僕のファウストにする意気込みなり。どうして支那、日本の文學者は此の材料に目をつかなかったのかな?」とある。(中島敦全集第一卷五六九頁)
- (12) 中島敦全集第三卷三三一—三三三頁
- (13) 同右 第一卷二九二—二九三頁
- (14) 同右 三一四頁
- (15)(16) 同右 三三二頁
- (17) 同右三三四頁

(18) 莊子外編森三樹三郎訳注(中公文庫昭和四十九年) 三三六頁

(19)(20) 中島敦全集第一卷四五五頁

(21) 同右 四五九頁

(22)(23) 同右 四六〇頁

(24)(25) 同右 四六一頁

\*

ニーチェの複雑な全体から、自然に関する一本の糸を粗く引き抜いたのであるが、その意図はこの一本の糸をたどることが、ニーチェに近づき得る様々の糸のうちの一本であるに違いないと思われたからである。前に述べたように、今後はこの一本の糸を詳しくたどってみたいと思っている。またニーチェにおける自然の問題は、否応なしに、我々の持つ自然観の問題を考え直させるのであり、それを、中島敦の作品を介して考えてみたわけである。そこから得たものは結局次のようなことと思われる。人間が自然から見出すものであれ、学び取るものであれ、それを自然から独立させ、その独立させた世界にゆるぎなき価値を置く歴史を持つか否か、それが極めて重要な意味を持っているということである。自然に対抗して、一つの世界を打ち建てたか、自然に従ったかの問題であろう。

『名人伝』の主人公紀昌に自然化した人間の姿を見出せようが、それは自然に敗北した人間の姿とは思われない。死そのものが無限の世界への融合であっても、生命の終ることによって全てが終る死ではないように思われる。いい換えれば自然と人間の融け合う様をそこに見出せよう。そこには自然から独立し、自然と対抗する世界は見出せないのである。

一方ニーチェは、自然から独立した世界の基盤に鋭い目を向け、その世界の崩壊する事実を見据えていたように思われる。そして人間の内と外とにある自然を包含し、統一したものを打ち建てようとしたかに私には思われる。ともかく、ニーチェが自然に関して語るそのことが、自然から独立した世界への批判として現われざるを得なかったことは事実であろう。

ところで冒頭で述べたように、自然とは何か、何を意味するか、人間は正しく答えることは出来ないかも知れない。自然そのものが語らない以上、そう答えるより方法がないであろう。自然そのものの存在と、自然そのものを認識することの間には埋めることの出来ない深い溝がある。自然に従うということも、実に困難な問題を含み、容易ならざるものがそこにはあると思われる。まして自然を実現しようとするニーチェの思想は、狂気をも孕む思想であるかも知れない<sup>(1)</sup>。しかも人間が自然に従う歴史の中に、ニーチェは生れたのではない。

(1) 小林秀雄は「ランボオⅢ」(小林秀雄全集第二巻一六六頁)の中で次のように言いきっている。ニーチェに関して述べたものではないが無縁とは思われない。

「人間が種族保存上、有効に行動し生活する為に、自然は、人間に、知性といふ道具を與へたのは確からしいが、己れの謎を解いて貰ふ為に與へたとは到底考へられぬ事である。従つて、知性は、行為の正確を期する充分なものだけを正確に理解する。物と物との関係には、いよいよ通曉するが、決して物の裡には這入らない。その様なことは無用の業でなければ狂気の沙汰だ。恐らく、存在と認識との間のディレクティックは、永遠に空しいであろう。」